

● 第12回野外見学会のご報告 ●

南 寿宏

4月23日（日）、本山町で第12回野外見学会を行いました。参加者は40名を超す盛況でした。講師はポリテクカレッジ校長で高知大学名誉教授の鈴木 堯士氏です。

見学会は、吉野川の支流、汗見川で行いました。汗見川は、愛媛県境の佐々連尾山を源流とし、本山町を南北に流れ、土佐町田井で吉野川に合流しております。この川は、三波川変成帯を走向と直角に縦断・侵食しているのです。同帯を余すことなく連続的に見せてくれます。

三波川帯は、群馬県南部を流れる同名の川を模式地としています。そして、中央構造線の南に接して、東日本から西日本まで、細長く分布しています。そのうち、最も幅が広く、また、最も研究が進んでいるのが四国中央部です。

三波川帯は、高圧型の変成岩である結晶片岩に代表されます。三波川帯は、岩石に含まれる鉱物の種類や組み合わせによって、南から北へ低変成の緑泥石帯から中変成のざくろ石帯、高変成の黒雲母帯の順に規則的に並んでいることが分かります。そして、それらが著しく褶曲し、ナップ構造をとっています

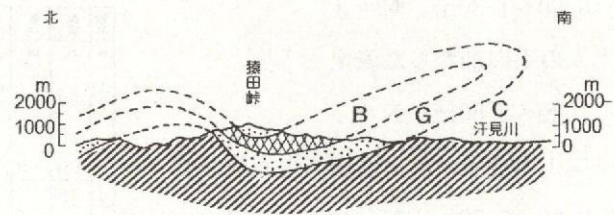


図 三波川帯の変成分帯と褶曲構造
Cは緑泥石帯、Gはざくろ石帯、Bは黒雲母帯
(鈴木著「四国はどのようにしてできたか」による)

(右図)。当日は、南の緑泥石帯から北に向かって順に見学しました。

集合地点は「亀岩」です。亀岩という名前は、川原の結晶片岩の岩体の形態に由来します。その亀の形は、案内標識の位置から見るとよく分かります。さて、皆で亀の背中に乗り、鈴木先生の説明を聞きます。三波川帯の年齢は、二つあります。一つは母岩の生成年代、もう一つは変成年代です。前者は白亜紀中期、後者は白亜紀後期だそうです。つまり、三波川帯は、母岩（泥岩であれ、チャートであれ）が海底で形成されると、大急ぎで地下数10kmまで沈んで変成を受け、休むまもなく、あわただしく地上に露出、侵食を受けるという、忙しい人生ならぬ岩生を経験したわけです。

川を2kmほどさかのぼり、県道から川原へ道無き道を降りること数10m。緑色の結晶片岩の岩体がありました。この緑色片岩は、母岩の枕状構造がそのまま残っています。まさか、こんな山中で枕状溶岩に出会えるとは。これには感動しました。今回の巡検ルートでぴか一の物件です。

その後、昼食時に迷子が続出するというハプニングを交えながらも、低変成から高変成まで順に見てまわり、巡検は成功裏に終了しました。これも、高知市から高速を使って1時間以上という遠距離にもかかわらず、多数ご参加いただきました皆様方のおかげと、感謝しております。

鈴木先生には、学校長という重職にありながら、私どもに貴重な時間を割いて丁寧に説明していただきました。ありがとうございました。これからも、ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

なお、今回の見学地について、もっと詳しく勉強してみたい方は、鈴木先生はじめ、本会会員が執筆している『地学ガイドブック高知県編』（コロナ社より近刊）をご購入のうえ、ご覧ください。まあ、商売上手なこと。